

○マナオス日本人学校

マナウスは 100 年ほど前に天然ゴムで栄えたが、天然ゴムの種子を持ち出されて東南アジアに産地を奪われてしまい、近年はフリーゾーンとして活性化し人口約 120 万の都市となった。

S58 ナショナル、ソニー、サンヨー、シャープ、シチズン、セイコー、ヤマハ、ホンダ、昭和、メタルフィーノ、ムラタ、総領事館で『マナオス日本文化振興会』を組織して学校運営に当たった。日本のカリキュラムのためブラジル政府から正式な学校と認められず、非公式扱いだった。

児童生徒は約 3 年で帰国するため出入りが激しく、小 1 ~ 中 3 で 20 名前後だった。職員は 7 名、現地採用職員が 3 名程度。教育課程は、週 2 時間ポルトガル語の授業が入っている点が日本と異なる。

郊外の日本人移住地に新築された学校の周囲には畑やジャングルがあり、自然に恵まれていた。ハチドリやナマケモノやヘビや大きなイグアナ等が時々学校訪問に来たり、近くの川では 1 ~ 2 m のワニも見かけたりした。「世界の珍虫・奇虫」図鑑に載っている昆虫もいた。



学校にやってきたナマケモノに喜ぶ娘と息子



学校にやってきた体長 1.5m のイグアナ



学校近くの川にワニがいた

子どもたちは治安の関係からアパートでの生活が多く、スクールバスで往復のため、学校が唯一の交流の場だった。

休み時間にはいっしょに鬼ごっこや、ドッチボールをしたりする姿が見られた。



ab ó bora は、熊本弁「ぼうぶら(カボチャ)」の語源
小 1 担任の私は、「ゴリラ先生」と呼ばれた

○ハキリアリに出会って、国語→理科

1 年目、小 3 女子 5 名の担任だった。学校だけが友だちと楽しく過ごせる場だから、休み時間はいっしょに遊んだ。



ジャングルジムでは、ゴリラと子ザル

休み時間になると、職員室に「ゴリラせんせー、あ・そ・ぼー」という子ザルの声が飛んできた。ジャングルジムでの遊びは、5 匹の子ザルがゴリラを落とすことす作戦から、ゴリラがいかに逃げるかだった。

小 3 国語の「アリの行列」を木陰で朗読していたら、「本物のアリを観察しよう」で、急に理科に変わった。しかし、見つかったのは木の葉を運ぶ「ハキリアリ」だった。

子どもたちの興味はアリの食べ物に注がれ、紙の上にビスケット、チョコレート、キャラメル、肉、梅干し等を置いてみた。すると、ハキリアリは、食べ物ではなく、紙を切り取って持って行った。これには、びっくりだった。

次に、「どこから木の葉を運んでくるのだろう」と探すと、木の上で葉を切り落としている鋭い歯と頑丈なあごを持ったアリがたくさんいた。

結局、行動範囲 500m 四方の中で見つけた巣穴の中で、木の葉を材料として、キノコ(菌糸の塊)を栽培していた。



木の葉を運ぶアリ、大運び役、小見張り役

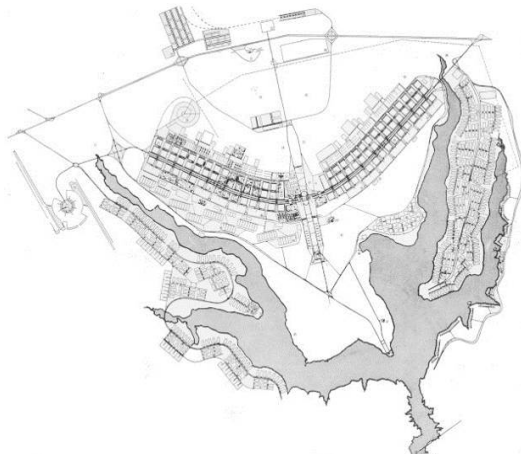


木の葉を切り落とすアリ「ハキリアリ」

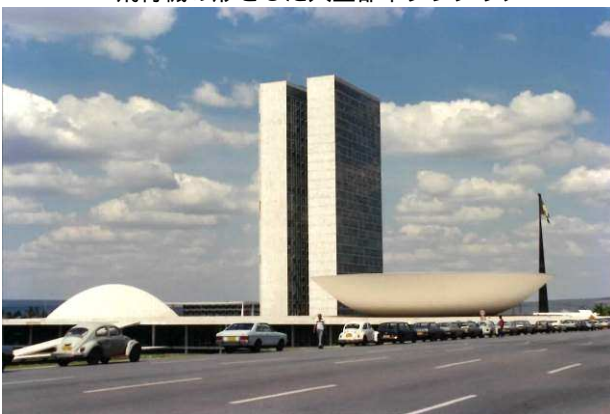
○修学旅行

修学旅行は小4以上で、アマゾン川下流のサンタレン、アマゾン川河口のペレーン、首都ブラジリアに、3年サイクルで行っている。私は小中学生15名を引率し、飛行機で4時間かけて首都ブラジリアへ行った。

ブラジリアは1956年に「50年の進歩を5年間で」というスローガンとブラジルの内陸部を発展させるというコンセプトのもと未開の土地を切り開いて作られた未来型人工都市で、街は飛行機の機体を形作っている。



飛行機の形をした人工都市ブラジリア



中央は国会議事堂、左右は上院・下院



カテドラル(ガラス張りの巨大円形大聖堂)

飛行機やホテルはマナウスの旅行社で予約するが、ホテルの予約が取れていなかったり、飛行機も1~2時間遅れたりすることがよくあった。

前回旅行時には、予約していたはずのホテルの取れていなかったため宿泊できなくなってしまい、日本から移民された方々をお願いして集会所にマットを持ち寄ってもらって宿泊したということもあったそうだ。

○アマゾン川自然教室

H3、アマゾン川で自然教室を行なった。

当初、保護者は「子どもたちを無事に日本につれて帰るのが自分たちの役目である。もしものことがあったらどうするのか?」と猛反対だったが、結局実施になった。

事前準備として、遠足やミニ体験学習で船に乗ってアマゾン川へ出かけ、川で泳ぐ、釣った魚で昼食を作る等の野外活動を行った。

自然はすばらしいものばかりではなく、一歩まちがえればたいへんなことになる。川にはピラニアやワニを始めとして、危険な動植物がたくさんいる。何がいるかわからない。流れに漂っている藻で、体に触れるととてもかゆくなり夜も眠れなくなるものもあった。

アマゾン川の水位は、乾季 雨季で10mの差があり、1日に水位が20cmも増減する。1週間も経てば、川の様子はガラッと変わってしまう。高さ50cmだった滝が、数mの高さになっていたこともある。だから、活動予定の場所の直前の下見は、絶対に必要だった。

マナウス市の上流80kmにある島で行うことになった。この島は乾季になって水が引くと現れるが、雨季には水没するので、危険な生物が少ないとのことだった。



この船で出かけたが、まるで海みたい

しかし、そこはモーターボートで3時間近くかかる地だった。まさかを想定して無線連絡、救急車の手配、ヘビの血清等の準備をしようとした。例えば「ヘビに噛まれたら、そのヘビを捕まえてきなさい。種類がわからないと血清も使えない。一度噛まれれば、何度噛まれようと噛まれたこ

とには変わらない。」と笑うに笑えない話もあった。幸いに、大事には至らなかったが。

切ったつる植物の枝から流れ出る水を飲んだり、真っ暗闇の中から聞こえてくる動物の鳴き声に耳を澄ませたり、南十字星を観察したり、11名の子どもたちは大自然の中で、貴重な体験をしながらたくましく生きた。



大きな魚がたくさん釣れた→おかずだ



手作りのかまどで火を起こして魚を焼いた



ピラニアのいる川でカヌーを漕いだ



手作りのいかだが、なんとか浮いている



ハンモックやシートの上で寝た